

## 時の流れから一瞬を借りて

黄祖恩（博士課程一年）



2025年2月23日に中国思想文化研究室同窓会学術交流会・総会、そして影山輝國先生御講演会が開催されました。多くの在学とOGたちが対面・オンラインで参加し、一日を通して様々な学術発表と交流を行い、親睦を深めました。

午前、在学生の孔詩さんと廖嘉祈さんによる研究発表が行われました。孔詩さんの発表「明寧献王朱権によるモンゴル時代の道蔵焚経に対する認識」では、モンゴル時代の道蔵焚経を手がかりに、明の皇族・朱権がその事件をどのように認識し、道教を崇拝しながら仏教を強く批判する思想構造を形成するに至った背景について探究しました。廖嘉祈さんの発表「復讐を夢見る思想家——兵学者・平山行蔵(1759～1828)の位置」では、幕末における兵法家・平山行蔵に焦点を当て(毎晩甲冑を着ながら寝て、罪人たちを率いて蝦夷地でロシアと戦うよう所望したという逸話もある人物です)、彼が赤穂事件や文化日露紛争に対して即時復讐論を唱えるとともに、同姓不婚と結びつけて九世復讐説を主張し、独自の論理を構築したことを指摘しました。

午後は OB である平澤歩先生と水口拓寿先生による研究発表が行われました。平澤先生の発表「漢代今文経学は清朝を予言する——迺鶴寿の五際説解釈」では、迺鶴寿の五際説解釈が同じく清代の孔広森・魏源・陳橋樑とは全く異なるアプローチを採ったことを指摘しました。迺鶴寿は『詩経』の大雅・小雅一百一十一篇を八部に分け、八部 816 年間を一紀とし、五紀 4080 年間を「大周」としました。この「大周」は乙亥紀亥部乙亥年(B.C.2446)に始まって崇禎七年(A.D.1634, 後金天聰八年)に終わり、そして次の「大周」は第二年(A.D.1636)が清王朝建国の年に当たります。このことから、この理論が明らかに明清革命に符合するように作られたものであることを示しました。

水口先生の発表「占いは娯楽である——勞思光の術数観とその思想的基盤」では、勞思光の術数観を通して、20 世紀後半から 21 世紀初頭の「中国哲学」系知識人が、術数を条件付きで肯定した事例の一つとして分析しました。勞氏は思想史家として「心性論中心之哲学」を積極的に評価し、「義命分立」の立場を取り、人の主宰性を擁護しました。そして、彼自身が術数を実践した人物ではありますが、それにもかかわらず術数を「深く信じる」ことはせず、術数は真正な知識ではないと宣言しました。また、「義命分立」の立場に基づき、易伝の所説を肯定的に評価する一方で、邵雍に対しては徹底した否定的な評価を下しました。報告ではこういった事柄を紹介しつつ、「義命分立」の立場から、勞氏の術数に対する考え方には、さらなる研究の余地があることを指摘しました。

最後に、影山輝國先生による講演「鈔本『論語義疏』との格闘」が行われました。影山先生は1988年まで、東京大学にて学生・教養学部の助手を務め、実践女子大学で三十年間にわたり、漢代の災異、五行思想と『論語義疏』の研究に専念しました。「漢代における災異と政治-宰相の災異責任を中心に-」、「董仲舒に至る災異思想の系譜」、「『論語義疏』根本刊本の底本について」、「皇侃と科段説—『論語義疏』を中心に—」などの論文を発表されています。今回の講演では、2003年8月に栃木県立足利図書館(現 足利市立図書館)にて足利本『論語義疏』の古いマイクロフィルムから紙焼を作ったことを契機に、本格的な『論語義疏』の研究を初めた経緯と、この20年以上にわたる鈔本『論語義疏』との格闘の過程について語られました。

現在所蔵が確認できる鈔本『論語義疏』は38種に及びます。日本の慶應義塾大学附属研究所 斯道文庫、慶應義塾図書館、大東急記念文庫、京都大学附属図書館、前田育徳会尊経閣文庫、東洋文庫、足利学校遺蹟図書館などのほか、台湾国立故宮博物院図書文献館とフランス国立図書館でも所蔵が確認されています。さらに、先生は『論語義疏校勘記』、『論語年譜』、『経籍考』、『善本書室蔵書志』といった蔵書目録・年譜・校勘記・論文等々の多様な手がかりを用いて、所在不明の27種の鈔本についても考察を加えています。そして、これらの鈔本に対する網羅的な校勘を通じて明らかになった、江戸時代以降に刊行された版本(最近刊行された排印標点本を含む)の問題点について語りました。

講演は二、三時間と限られた時間でしたが、先生は熱意を込めて、二十年以上にわたる研究の奮闘と苦悩を語って下さいました。このお話を通じて、真理にあこがれて赤門をくぐってから、学問によってみずからを培うべく、研究者として自らのすべてをかけて、歴史に残っている疑問に真摯に向き合う姿勢を垣間見ることができました。

この一日は、止まることのない時の流れの中から一瞬だけ借りて来て、年齢や国籍・研究関心を超えて真実を追い求める人々が集まった、特別な時間であったように感じられました。

